武蔵野美術大学 大学院 博士後期課程

学位申請論文公聴会

日　時　平成28年2月17日（水）14時～

場　所　2号館104教室（FAL）

このたび大学院造形研究科博士後期課程では、
学位（博士）申請論文公聴会を開催する運びとなりました。
公開制のため、どなたでも公聴会にご参加いただけます。
ご興味のある方は、ぜひご来聴賜りますようご案内申し上げます。

学位申請者

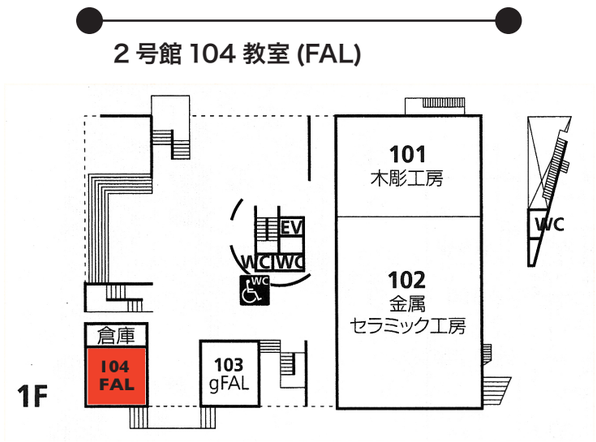
ベンヤミン・フィツェンライター

博士後期課程環境形成研究領域３年

論文題目

歌舞伎のセリ上げにおける表現を巡って

—「けいせい天羽衣」のセリ上げの復元と視覚言語的分析—



お問い合わせ先：教務課教務担当博士後期課程準備室
042-342-9514（内線3305）

武蔵野美術大学 大学院 博士後期課程

学位申請論文公聴会

発表者　ベンヤミン・フィツェンライター　環境形成領域｜博士後期課程環境形成研究領域 3年

論文題目　歌舞伎のセリ上げにおける表現を巡って
—「けいせい天羽衣」のセリ上げの復元と視覚言語的分析—

論文の要旨

本論文においては、1753年に大坂で初演された「けいせい天羽衣」という日本の歌舞伎作品における「大道具のセリ上げ」と呼ばれる舞台装置を研究対象とする。「セリ上げ」はある芝居における大道具と登場人物を舞台下から上げるエレベーターのような機械である。歌舞伎の「転換道具」の代表的な実例として論文の第１部においては「天羽衣」の「セリ上げ」の復元を行い、その結果について第２部においては視覚言語的分析を試みる。

まず、当時の歴史的文化的背景、大坂の芝居街・道頓堀の成立、「天羽衣」に関する基礎的な情報について調査を重ね、芝居の筋を要約し、作者並木正三の伝記の概要を挙げる。正三の独特な作法の成立は、からくり芝居・人形浄瑠璃で働いた頃の経験と彼の「作者・技術者・舞台美術家」という三種の才能が複合的に合わさった結果であることを推論する。

次に、初演の「天羽衣」の大切りの空間演出、とくに「セリ上げ」の形と機能、当時の大坂の舞台様式を推定復元する。復元のために「天羽衣」の台帳の解読を主軸として行い、また、様々な江戸時代の書物や絵画の一次文献も資料として活用する。資料に基づき「天羽衣」の「セリ上げ」は「押し出し道具」の屋根と「セリ上げ」の座敷、２つの個体的な部分によって組み合されていたことを推論する。なお、大坂の大芝居劇場は江戸より速く能舞台からの解放化を実現し、特に舞台縁の線は能舞台のスリーサイド・ステージよりまっすぐになり、それは人形浄瑠璃の舞台の影響とも関連し、舞台の正面化を高め、強大な転換道具の発展を支えたと仮説する。その仮説を「天羽衣」の初演の舞台面とセリ上げ、大道具の復元図と復元模型によって示す。

さらに、記号学・記号論的な方法により「セリ上げ」を視覚的記号・表現として構造分析し、「セリ上げ」の物語論的かつ意味論的、構文論的、語用論的な特性を検討する。「セリ上げ」における「記号表現」は「屋台の色彩と形」と「垂直的な動き」からなることを明らかにする。「セリ上げ」の「大道具の部品」は高いアイコン性とインデックス性を持ち、「仕掛けの部品」によって果たされた「動き」は現実には存在しないものとして高いシンボル性を持つことがわかった。「セリ上げ」を大道具の「視覚言語」と演劇の筋を総合する視覚記号体系として解釈し、通常幕などで場面を分ける「境界線」は、「セリ上げ」の使用によりそれ自体が物語の単位となるという特性を示す。なお、意味論的な面で「セリ上げ」の表現は「天と土」や「上と下」のような、人間の社会や信仰、精神における普遍的な原理と関連することについても述べる。構文論的な分析により「セリ上げ」が舞台上のフィクション的な空間を広げる特性を明らかにする。屋台の形と仕掛けの上方向の動きにより舞台面の「垂直性」と「正面性」が高まり、舞台の上と下の空間は単位に分かれる。また、仕掛けの動きにより舞台上のフィクション的な世界が動かされたので、観客の視野が広がり・変化する。

比較の章においては「天羽衣」の「セリ上げ」の特性と３作の歌舞伎芝居における「セリ上げ」を比較する。「垂直性」や「正面性」、「絵画性」という特性は全例において見られ、「空間の単位」の特性にも共通点があり、「セリ上げ」は建物を上げ、この建物の一階と二階、屋根は空間の単位となり、人物がどの単位に配置されているのかということは、彼らの役柄と関連していた。また、人物の目線や液体など、「空間の単位」を繋げる要素は筋の中で重要な役割を持っていることも明らかとなった。

最後に歌舞伎の「セリ上げ」の特性を江戸時代の印刷物である「錦絵」と「合巻」における表現と比較する。
「錦絵」の実例では江戸時代の絵師が「セリ上げ」の場面を平面的な媒体に描写するために大判何枚かを並べる「続絵」と呼ばれる形式を利用した。縦の「二枚続き」または「三枚続き」により「セリ上げ」の形を立体的な舞台空間から平面的な錦絵へ変換した。時間軸は存在しないので「錦絵」の物語性は比較的低く、芝居から最も迫力のある「山場」が選択された。すなわち、絵師は「セリ上げ」を紙上に表す為に媒体の特質を利用する工夫を考え出したのである。
「合巻」という絵入り小説においても「垂直性」や「動き」など、「セリ上げ」の特性を紙上表現する画法が見られ、その画法から媒体の特質に適応する独特の垂直的な画法が発展した。絵師は製本の見開き２ページにわたり、垂直的に配置された挿絵の構造を利用し、「垂直性」を実現させ、受容者はこの垂直的な挿絵を観賞する為に本自体を廻すこととページをめくることが必要となった。そうした表現は「口絵」の場合では歌舞伎の見得のように人物を奇麗に見せる「絵画的」な効果を目的とし、見開き二枚・三枚を並べる画法もある。それに対し、「本文の挿絵」の場合では筋を進行させる・筋の空間を見せる為に見開き２ページにわたる挿絵が度々利用されている。
結論においてはすべての研究成果を解釈し、「セリ上げ」と「セリ上げ」に近似する印刷物の表現における「意味」と「構造」の相互関係について述べる。「物語の視覚言語」の「基本文型」と「セリ上げ」における「ミニ物語」についての仮説で本論文を完了する。